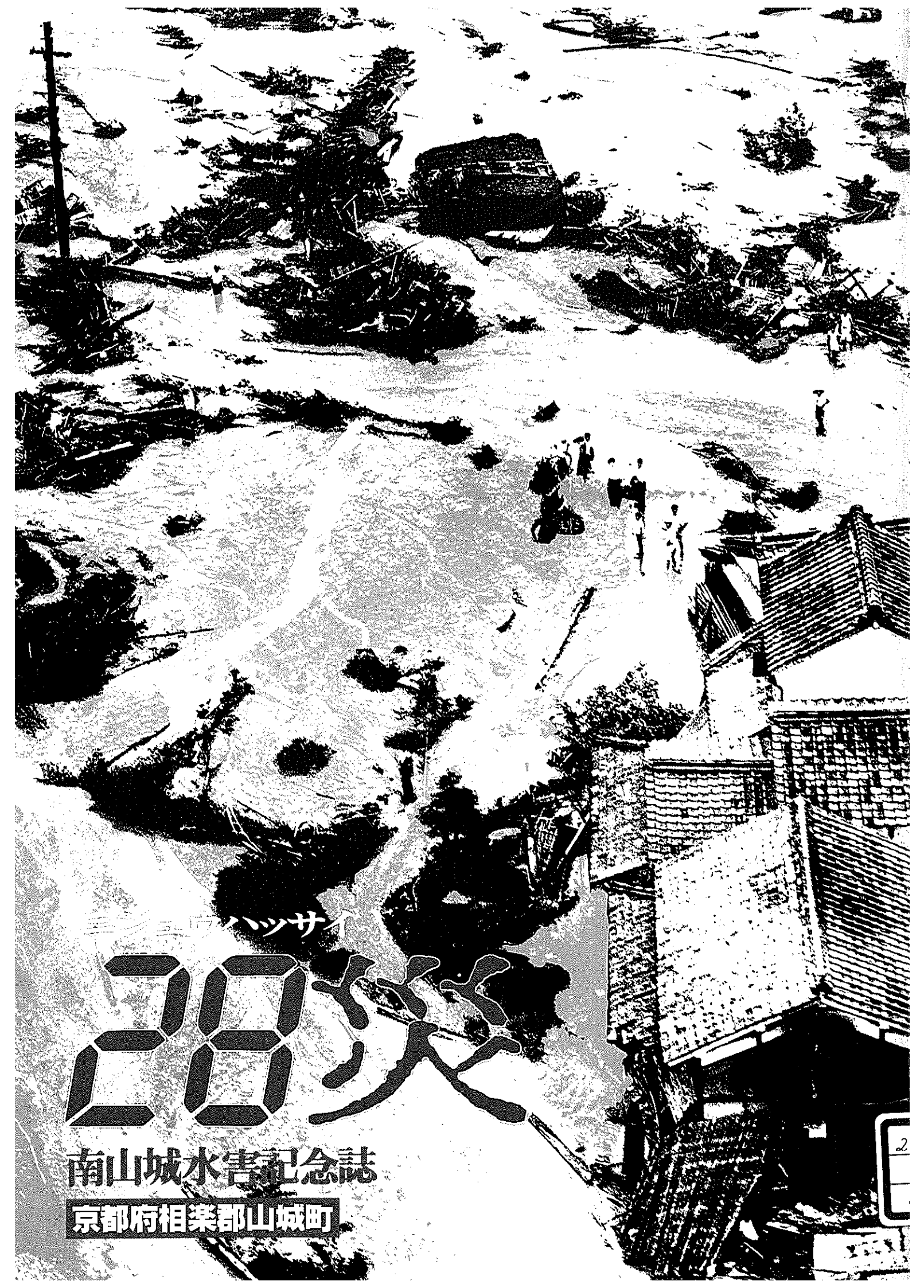




三ノ宮ハツサイ

2025

南山城水害記念誌

京都府相楽郡山城町

水つき

国道へいった。

じどうしゃが、

さいれんをならして走っていく。

あたり一めんどろの海、

むこうの方に、

田がはんぶんみえている。

はしらがこっちへ流れてくる。

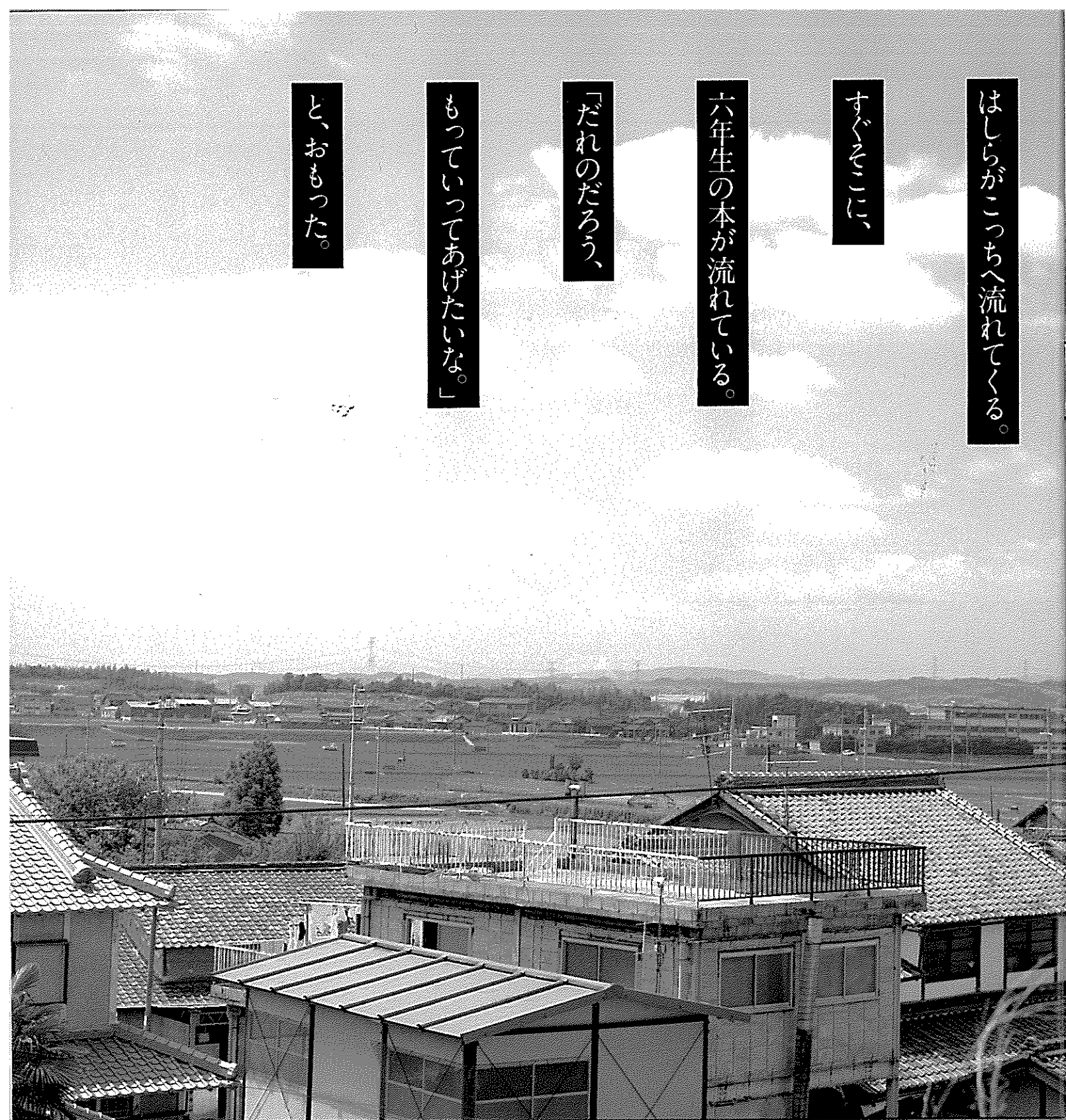
すぐそこに、

六年生の本が流れている。

「だれのだろう、

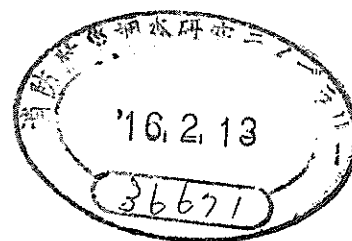
もって行ってあげたいな。」

と、おもった。



もくじ

- 2 ドキュメンタリー 南山城水害
- 悪夢／現実／虚脱／忘れ得ぬ夏休み
- 10 わがメモリアル／28災を語る
- 14 やま&かわ
- 18 年表／水と関わる
- 22 災害を防ぐ／治山・治水事業の変遷
- 24 心得ておきたいこと



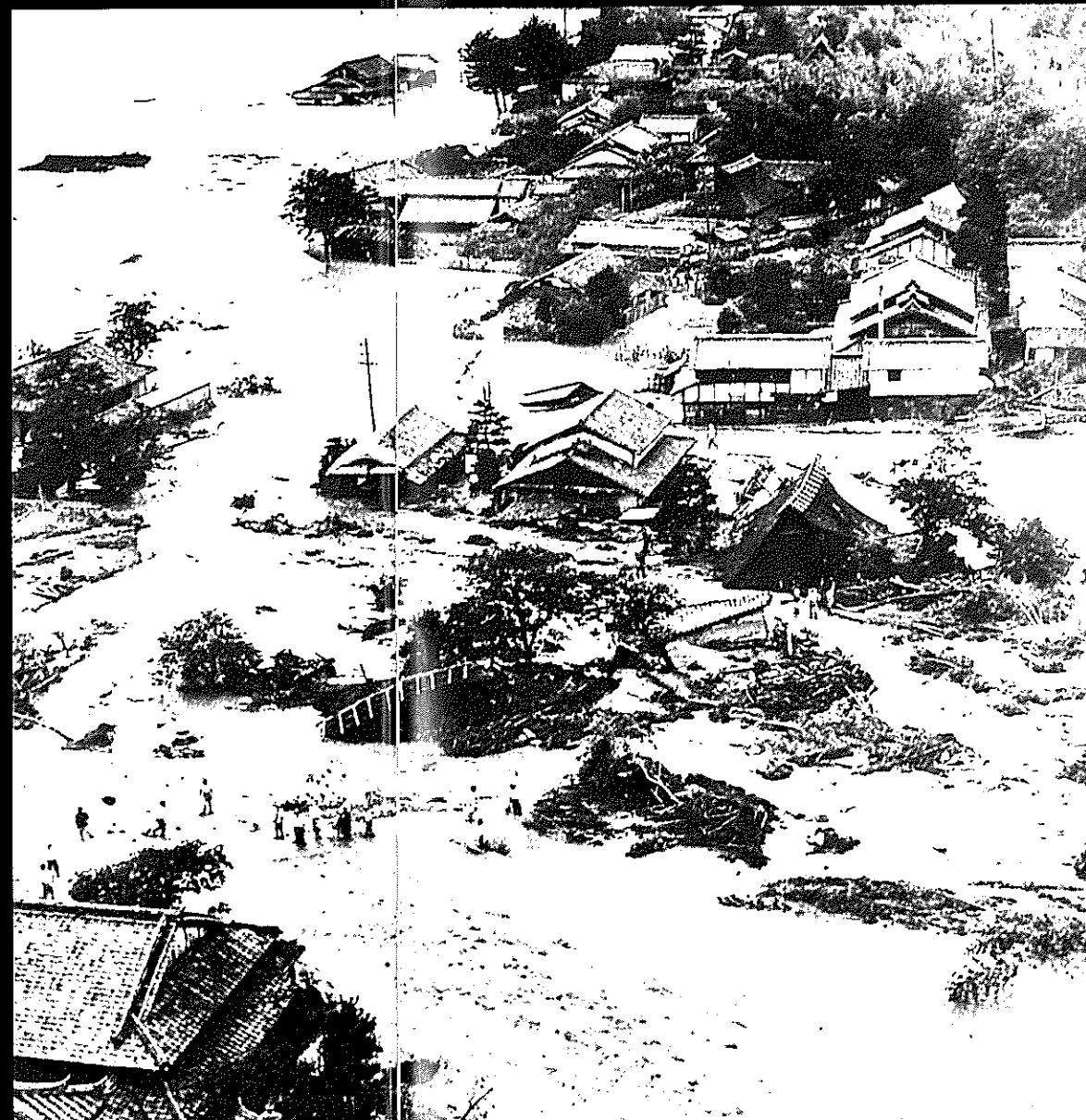
写真上／昭和28年夏、綺田蟹満寺周辺。復旧作業に汗を流す人々。写真左／30年後、昭和58年夏の同地、天神川堤防より南を望む。詩は当時上狛小学校2年生組、田中あけみ（現榊原明美）さんの作品。



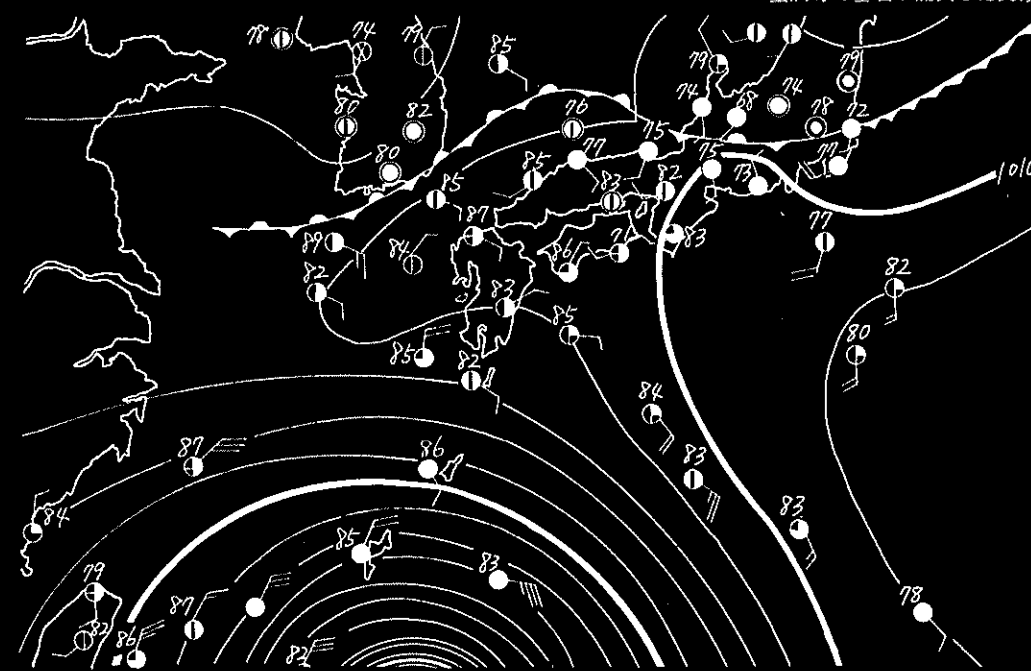
蟹満寺の墓石が流入した民家



不動川の決壊口



天神川の決壊



昭和28年8月15日 午前9時の天気図

ドキュメンタリー
— 南山城水害

夢

昭和二十八年八月二十四日、宵からの通り雨は精霊踊ににぎわう町の頭上に柔らかに降り注いでいた。先祖の霊も湿めすこの雨が数時間後に始まった大惨事の序幕だったとは、そのときだれが知りえただろうか。

ときは、おりからの盂蘭盆（ちなみに盂蘭盆とは梵語ではなほだしい苦しみの意）各家では精霊を迎えて供養を営み、親類縁者を招いて遅くまでざわめきが絶えなかった。雨足が強まるにつれて、家々の明かりも一つまた一つと消え、やがて談笑する声もやみ、町は夜の闇にすっぱりと包まれた。

人々の浅い眠りを覚ましたのはサイレンと乱打される警鐘の音であっ

夢

た。雨音と雷鳴にはばまれ、その音もそうはつきりと聞こえなかったわけではない。外は一寸先も見えぬ暗闇、雨は流のように降りしきり、ときおり夜空を不気味に引きさく稲光の中で人々は見た。三上山をいたるところで崩壊せしめた大雨が谷を川に変え、ものすごい濁流となって押し寄せてくるのを。

天地もくだけんばかりの雷鳴と火柱、うなりをあげて突進する鉄砲水は木を岩を根こそぎさい、橋を落とし、えん堤、堤防をつきすしていった。消防団の必死の抵抗をあざ笑うかのように、水は人を流し、家を流し、田畑を流した。破壊が始まっていた。



不動川決壊口より旧棚倉村役場を望む



水害の犠牲となった牛の哀れな姿。死体は硬直している



蟹満寺西側、天神川による被害



泥沼と化した不動川付近



一瞬にして流木にうずまった稲田

雨もあがり、夜もすっかり明けた六時半ごろ、すべては終わっていた。深夜の惨事がその全貌をあらわにしたとき、人々は一夜にして変じた郷土の姿にただあ然とするばかりであった。

ズタズタに切れた川ははく大な上砂を町中にまきちらし、秋の収穫を待つばかりであった美しい吉田は泥沼の底にあった。おびただしい数の流木が海と化した町一面に浮かび、その間にタタミ、タンス、一切の家財道具が漂っていた。府道、国鉄奈良線は各所で通行不能、通信、交通は大混乱に陥った。

うちの家（北河原）がえらい災難だというのに棚倉の親類はだれ一人

現 実

見舞いにも手伝いにもこない。不審に思い、川向こうにゆくとそこも惨たんたるありさまで仰天した。こういうことが現実にあった。

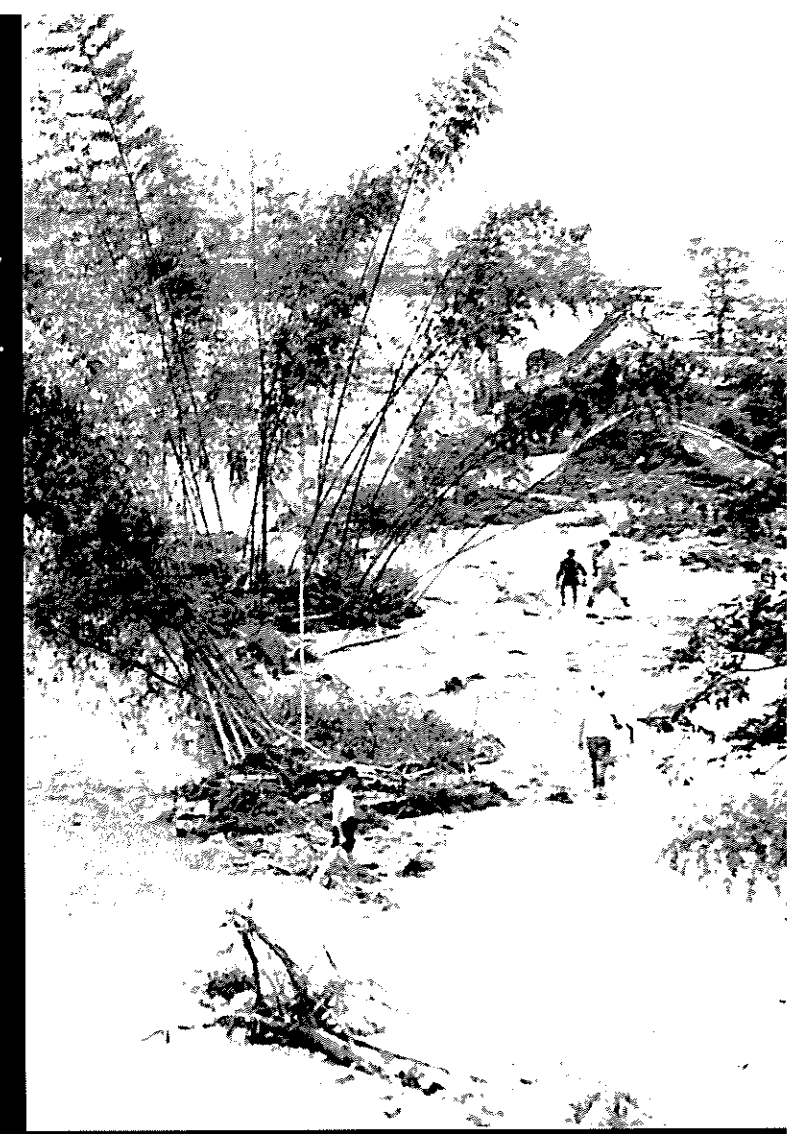
命からがら避難した罹災者は恐怖におののいて食事ものどを通らない。真夏だというのにあまりの寒さにいくら重ね着してもふるえが止まらなかったという。あの人もいない、あそこの子もみえない、あそこのおばあさんも流されたのか、行方不明者の発見に全力が注がれ、流木を、家をわたしたおして必死の搜索が続けられた。しかし、ついに捜しあてたその変わりにはた姿には肉親はもちろん、捜索隊も悲嘆の涙にくれるばかりであった。



平尾の府道を埋めた砂山



綺田山口の山くずれ



天神川の決壊地

ただぼう然とする決壊口付近の人々

焦燥と不安の入りまじった少女のまなざし



水害発生後、日々は夢うつつに過ぎた。真夏の太陽は泥の海を砂漠と化し、ひびわれた大地は町の苦悩を象徴していた。この惨状は、いったいどこから手をつけたらよいのだろう。着のみ着のまま逃げだし、家を流された人々はこれからどうして日々の暮らしを支えてゆけばよいのだろう。

しかし、復興へ向けての努力はすでに始まっていた。十五日未明には、災害救助法が発令され、同時に救済活動、応急復旧作業が開始された。ともかく、動ける者は老若男女を問わず、寝食を忘れて働いた。思うにまかせぬ復旧資材の調達、不安と焦燥にかられながらも、人々はスコップを持ち、ツルハシをふるい、重いモッコを担いだ。

不動川決壊による惨状（平尾国鉄踏切付近）



！痛ましい村々

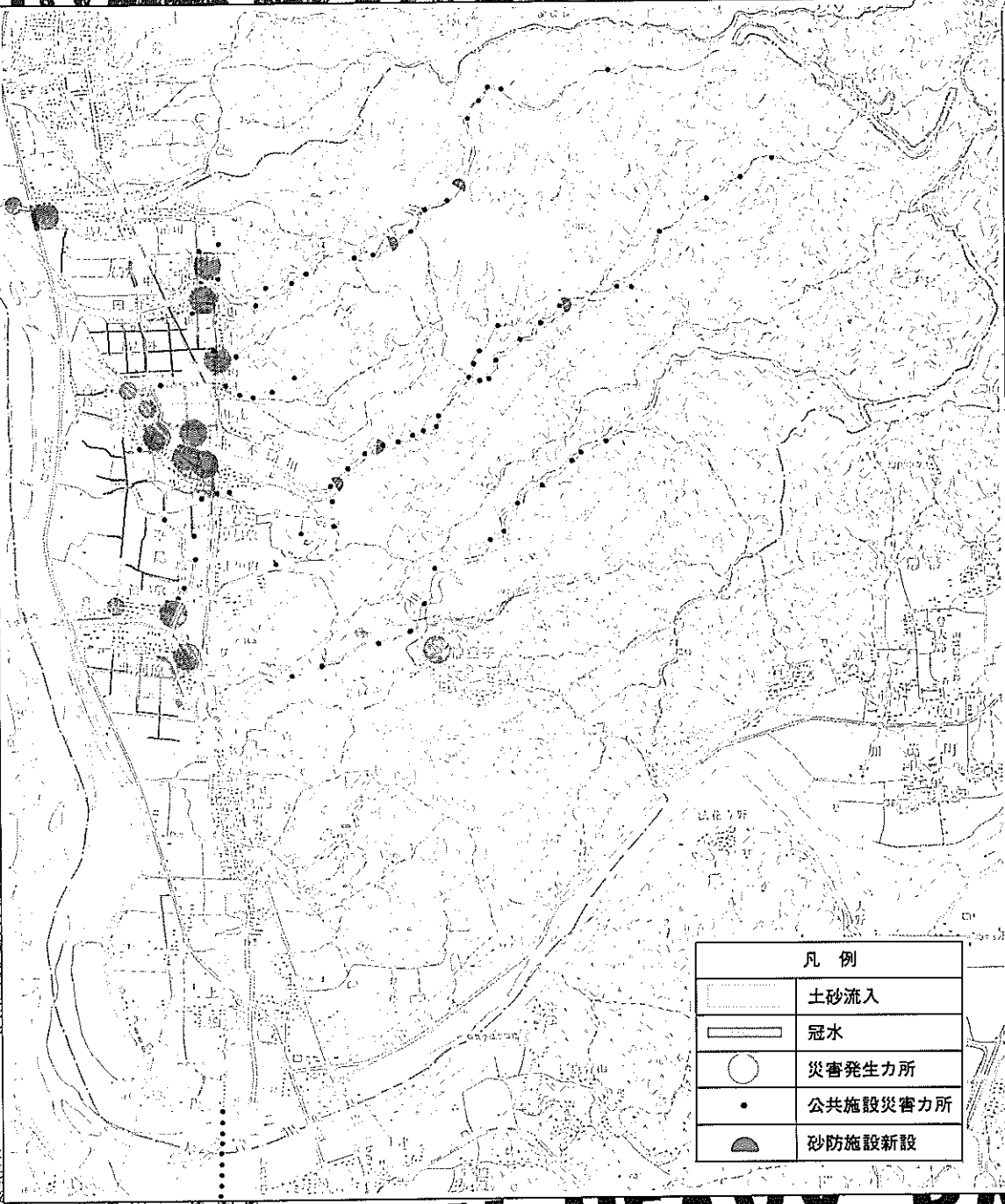
高麗、棚倉一帯をゆく

水害の命

この姿、變り果てた

蚊帳ごとと生垣と

屋根へ避難
死者一五



「不津港」京都府相模郡高麗、棚倉両村の行方不明土
倉向村を流れる高麗川
動川、五所
日午前五時
防災、寸止

災害救助法発動

豪雨

気象台、屋

AREA LASHED BY HEAVY RAINS

状況 地区別		罹災者総数	人的被害					住宅の被害										非住宅の被害	田畑の被害				道路決壊	橋梁流失	堤防決壊	鉄道不通				
			死	負傷	計	全壊	流失	半壊	浸水		計	流失	冠水	流失	冠水	計														
									床上	床下							流失		冠水											
																				戸数	人員	戸数					人員	戸数	人員	戸数
棚倉	倉	1,305	24	40	520	584	31	147	11	52	67	306	50	267	101	533	260	1,305	220	130	17	50	39	236	52	17	29	2	1	
高麗	上	517	7	8	34	49	7	40	10	52	14	77	33	187	32	161	96	517	45	57	27	20	13	117	25	7	16	1	1	
	上	85	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

助

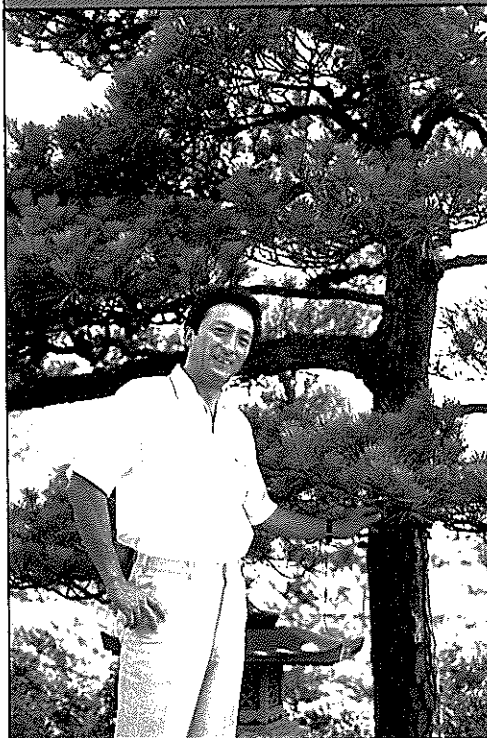
助

助

死体
救助
荒
本宅メに極大

忘れ得ぬ夏休み

あのときの小学生は
父となり母となった



「おそろしい雨」

上粕校 4 年

國吉基史

私の家のある所は北河原では高い方でしたから、その日椿井の谷川が危ないのでこっちへ水がついてきたら低い所の人を避難させてほしいという連絡がありました。そのしばらくあとに堤防がめくれるようにバサバサと切れて、鴨子川の水が上からまともにものすごい勢いで流れ込んできたんです。薄暗がりの中で「助けてくれーっ」という声が尾を引いてそのまま消えていったのが今でも耳から離れません。

庭の松の木は私の命の恩人です。この木に引っかけたおかげで助かったんです。大事にせないかんと思えます。

ゆうべから、たいへんおそろし勢で、降った雨が、上から下へと神童子のおくの、三上山の方から根のままの木がどんどん流れてきて、ダムにつきあたり、ダムはこわれて一度にぼく達の家の上の、鴨子川に一ぱいになって、川のていぼうがきれ、ぼくたちの方へ水が来た。ぼくの家へはうらぐちからうずをまいて入ってきた。バリバリ、メリメリ、ゴーゴーと……ガラスのわれる音や戸のひきちぎれて流れる音、ものすごい水の音、「さあっ、みんなしっかりと」とお

母さんが、いわれると一所に、うわしきと、たみと、ゆか板とまくれ上り、それと一所に、西がわのはなれの近くまで流されて出ました。ぼくは、はなれのざしきへとんで上りました。けれどもみんなはきません。「お母ちゃんもここへおいで」とぼくは、さげびました。「いこうと思ってもいけない」とお母さんがさげびました。水の深さは、もうすこしでせをこえます。ぼくは、む中で、お母さんの所へ近よると、また流されて、ようやく庭さきの木でとまりました。お母さんは、「西をむいては流されるっ」といわれるのでせんど東をむいていましたが、かぼちゃ品の所まで、また流されていきました。するとかぼちゃのつるで、うつちやみにかかったようになりましたが、それも助かり、水と反対に一生けんめいに、にげました。そして井戸へいって、いづつにくらいついていました。西を見ると、どうじに、はなれが流れていきました。だんだん足もとの、水もすくなくなりました。む中でせんろへにげました。あの時のおそろしかったことは、今も目の前にうかんでありません。

「水害の朝」

棚倉校 3 年

木村一豊

8月15日の夜あけ方のこと、ぼくがねていると、お母さんが戸をたたいておこしてくれました。ぼくはとび起きてにわに下りた。もう電とうはきえていた。ろうそくを立ててみんなにわにおりた。げたも足つぎも皆ういている。外に出るとかどは一ぱいの水である。その前の日に倉をこぼってあったので、その上にのぼった。水はどんどんとふえてくる。

水にまじって大きいざい木も小さなざい木もたくさん流れていく。どうなっていくのだろう。ぼくはおかあさんにしがみついた。

その時、大きな音を立てて、いんきよのほんやがこけました。つぎにぼくの前ののはなれがこけました。つぎにいんきよの小屋がバリバリと音をたててこけました。つづいてぼくのほんやがこけました。又米倉がと思う間に物すごい音と

一しよに小屋もこけ、竹やぶが流れて来しました。すると足もとの水が少しひきました。

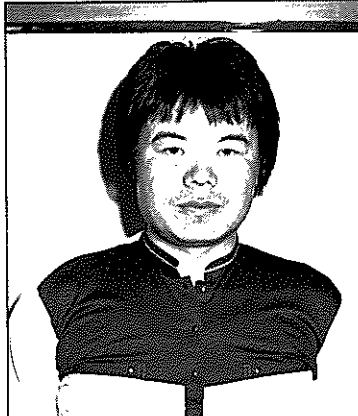
みんなはずぶぬれで、カチカチふるえていました。ねまきもぼろぼろのどろどろになりました。ぼくは兄ちゃんにおうてもらって、お宮さんまでつれてもらいました。その時、山口の方ですなけむりがあがってゴーとものすごい音がしました。

「あこもあかんなあ。」と思いました。それから村の人がにぎりめしをしてもって来て下さいました。いつの間にかおひるになっていました。

今は方々から着る物をいただいたので、それを着て学用品も色々いただいたのを使って、しんるいの家から元気よく学校へ来ています。ほんとうにうれしいと思います。

子どものころは天神川でよく泳いだものです。天井川のこわさはあの水害ではじめて知りました。なにせ雨はよく降りました、恐ろしいほどに。うちの家も流れたというよりもつづれたというほうがあたっています。

昔のことを思えば、今は河川もずいぶん整備されたものです。そのころは木津川も今よりウンと水量が多く、増水したときは国道から手が洗えたくらいです。そんなもんだから、天井川もあそこまで高くせざるを得なかったんでしょうね。



「水害」

上粕校 4 年

西井明美



家が上粕だったおかげでたいした被害もなくすんだんですが、あとから被害の大きさを知ってビックリしました。棚倉にあったおじの家では不幸がありまして、母はそちらの方へいったおり、ずいぶんとむごたらしい光景を見たらしいです。娘の私にはあえてその話は避けていたようです。けど、木津川が流木でいっぱいになり、ずっと後まで何年も河原に残っていたものもあったように記憶しています。

(現姓 曾根)

5時30分ごろラッパをふきにこられました。私はこわいのでお父さんにだきつきに行きました。火事かと思ってお父さんにたずねると、「大水」と、いわれました。

大ぜいの人が道へ出てやかましくいっておられたので、私はいもうと外へ出て行くとたくさんの方が集まって話をしておられました。私は、玉水・北河原・棚倉の人はどうしておられるかなと思っていました。

トラックや自転車か国道を玉水の方へ走っていました。見に行ったり帰ったりする人で国道はたいへんにぎやかです。北河原まで見に行くと、たたみ・おひつ・ます・材木やいろいろな物が流れていま

した。

ラジオで昼のニュースをきくと和束と大河原も大水になったといわれたのでびっくりしました。和束はたいへんきついといわれました。午後3時ごろこちらへくるといわれたのでうらの川へ見に行くと水が中学校の所までできていました。

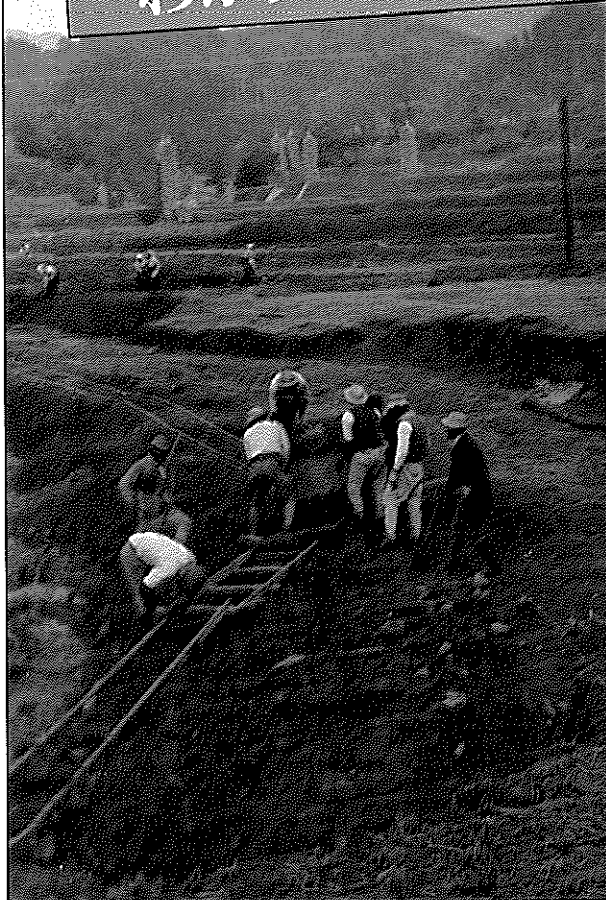
あとでお母さんが棚倉のしんせきの家へいってこられるとその家はぶじでしたが、玉水のしんせきが2けんとも流れてお母さんと子供2人がなくなっていることがわかりました。

大水はほんとうにおそろしいです。

28災を語る



わがメモリアル



復旧作業

えらいことやノ川が切れた 交通・通信も大混乱

福地 あの日、北平尾では精霊蹄をしてたんです、和伎神社（涌出宮）で。夕方からのおくり雨の中でですけどなんとか踊はできたんです。十時ぐらいからその雨がきつうなつてでけんようになりましたかな。

町長 あの水害は十五日の夜明けのことで、雨が、雨は十四日の晩から朝にかけて降ってたわけですね。

福地 近所の娘さんが「オッチちゃん、不動川が切れてん、逃げてきてん」いうて私の家に飛び込んできまして、私は最初信じられへんかったんだけど、外へ出てみたらそのときはもうザンザン降りの大雨です。

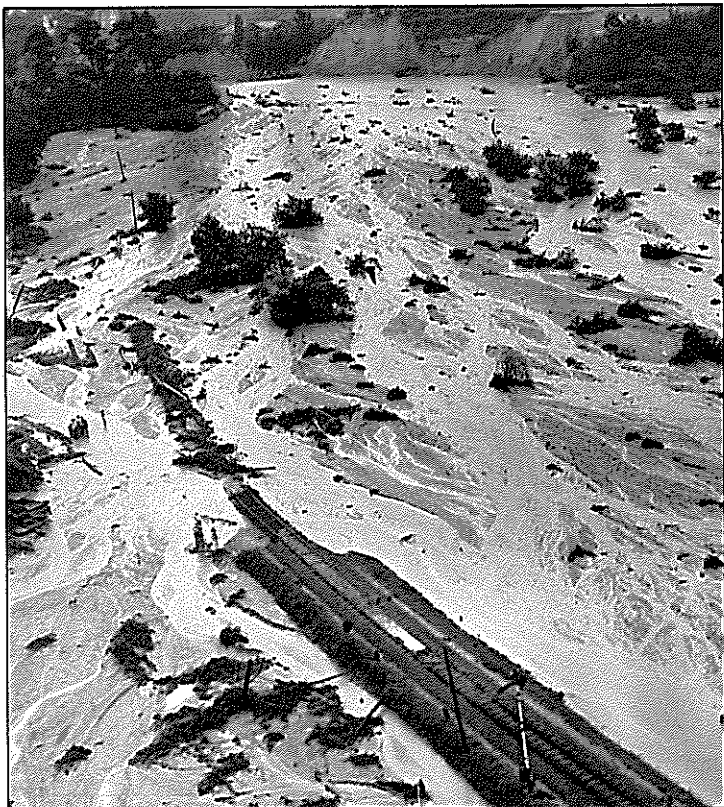
矢嶋 うちの方（北河原）では消防の人が宵から早いに夜まわりしてくれてはりました。

て、逃げようとしていたところでした。

福地 決壊の現場へゆこうと飛び出したら、今のかじやさんのところからもう一面水がついていました。ほんで、また元へ戻つてとにかく駅へ出ようと宮さん（涌出宮）を抜けたら、中でざわざわ声がしてましたわ。今から思えば避難してた人の話し声やったんですね。

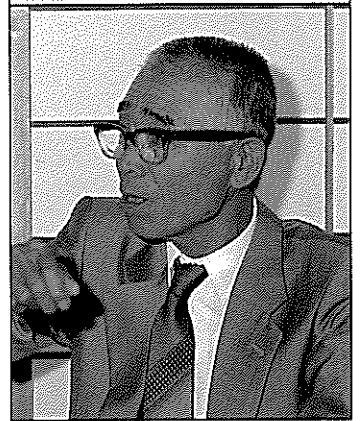
ともかく、木津（木津土木事務所）へ連絡せないかんと思って、中谷さん（中谷運送店、棚倉駅前）とこで電話借りよ思ったら、これが不通ですわ。ふとわきを見たら線路は水びたしです。これはえらいことやと思ってさらにガード沿いにゆくとそこも水です。ダーツと線路つたいにイナリ山の方へゆくと、鳴子川も

不動川決壊により埋没した国鉄（南河原周辺）



福地耕太郎（ふくちこうたろう）

元山城町助役。災害当時は棚倉村役場書記。復旧工事完成までの粉骨砕身の働きぶりは今では語り草になっている。現町選管委員長。明治42年9月3日生まれ、73歳。

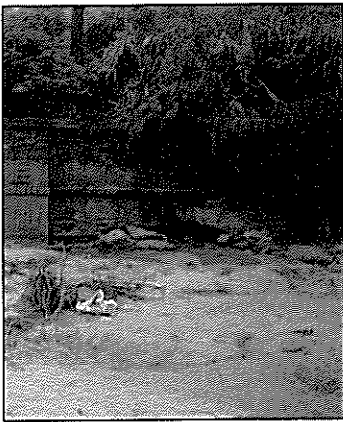


切れていて、線路はぶらんぶらんです。それで、元きた道を戻ると、不動川のトンネルがつぶれて人家の軒先まで砂に埋もれているのが見えました。ともかく役場へゆこうとする途中、郵便局でやつと木津に連絡とることができました。

トンネルこえて綺田へゆくと、綺田は両方から川切れてそら、えらいこっちゃ、役場へは着いたものの、ワシと西岡さん（棚倉村役場職員）の二人しかきやへん。木津には連絡ついたものの、そこからでは北の方、府庁には電話通じひんゆうことで、警察の無線を使て、やつと府庁に災害を報告することができました。三〇分もしたらヘリコプターが来しましたわ。

村田 その日は、十時ごろ役場（上狛町役場）に詰めてましたら、警察からの電話で、棚倉

土砂で埋まった国鉄不動川トンネル



の山口で山くすれの危険があるので避難するよう連絡してくれといわれまして、その時分単車にのれるのはワシだけでして、府道はそのときもう通れませんでしたから、国道を走って山口へ向かいました。途中から水びたしで単車はつといて、泳いでむこうへ渡ろうとしたら流木に足とられてザッツと押し流されまして、午前四時ぐらいでしたかな。その途中、二時から三時でしたか、北河原のむこうは川が切れてしても家あらへん、山口へゆけい命令やけど、いかれへん。なんとか、それも泳いでたどりついた家あらへん。水でズクズクになって役場へ帰ったら団長が、『どいつてきたんや』いうさかい、これこういうやうたらビックリ仰天ですわ。

木津川やない、上や！天井川や早く逃げろ

町長 当時 昭和二八年はまだ合併前で上狛町、高麗村、棚倉村の三町村やった時代で、村田さんも当時は上狛町の消防団やったわけですね。山口は旧棚倉村ですから、そのときは近隣の町村にも出動せいという指令があったわけですね。

村田 それは警察からの指令やったんです。

上狛でも南部の人は避難せいという命令がでていました。墓へ逃げた人、宮さんへ逃げた人、林のお寺へ逃げた人とさまざまでしたけど。警察からの連絡で和東がやられてるいうことでしたんで、どのくらいの水つきか加茂へゆく道をみにいったんですが、今のし尿処理場、一本松のそこからむこうは水ついていてけしまへん。そのくらい水かさが増えてたんです。

町長 ほう、当時は木津川もダム（高山ダム）

福地 役場からワシと西岡さんの二人だけや。消防団から、平尾は平尾だけ、北河原は北河原だけい具合に、めいめい自分とこだけ大災害や思とる。役場へ来る道はどこもきられへん、地区ごと孤立しとるわけや。そんなもんやさかい、消防団も統一した指揮はとれませんでしたな。まあ、今では想像もつかんような事件やつたのは確かや。後からの教訓ですが、交通・通信の整備はなにをさせておいても考えねばならん問題ですな。

村田 そうや、通信が一番大事やな。

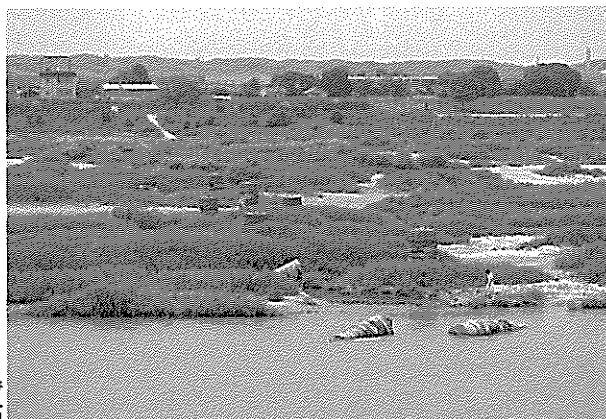
矢嶋 うちらの方では警察からの避難命令がきたんは午前二時ぐらいやつたと記憶しています。ほんまに、ようあのとき逃げよう、いうてきてくれたはった。

ないじぶんやし、上流が大雨やつたらそのま増水してたんですわ。なるほど、木津川の堤防が切れたら危いということで上狛に避難命令がでていたんですな。矢嶋 うちらも最初は、木津川いうてたんです。町長 今日び、大雨が降っても我々は木津川が危いちゃうことはええらう考えませんわな。



村田 昌三（むらたしやうぞう）

災害当時、上狛町消防団副団長。警察の補助員も兼任、救助・災害復旧活動に東奔西走した。本業は上狛で米穀商を営んでおられる。大正4年8月14日生まれ、67歳。

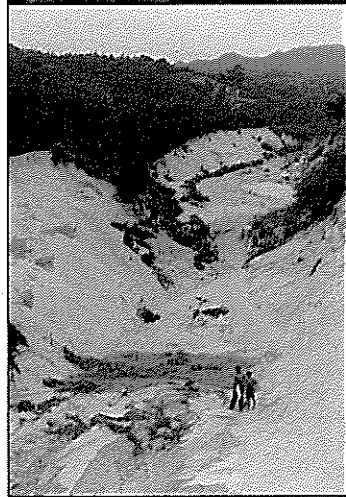
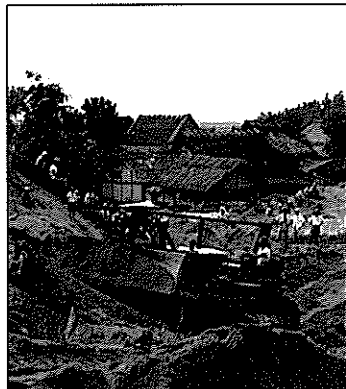


今も木津川に残る28災で流された旧泉大橋の礎石

内水で水たまるさかい、樋門の守りをしとって門を開くのはいつが一番いいかいいうことぐらいしか考えませんわね。『木津川が切れたら』いうことが一番こわかったわけや。実際は、あのときの被害は天井川を上から降ってきた土砂流、鉄砲水によるものでしたけどな。村田 泉大橋は流されましたけどな。矢嶋 男はあのときみな動員ででてくれいうことでしたんやわ。うちは主人が仕事でしたし、家の中は女ばかりでした。『水いっぱいや、

矢嶋喜久子(やしまきくこ)

災害後、開かれた高麗村臨時保育所で子どもたちの面倒をみる。災害当時、矢嶋さんは町に来たばかり、その日ご主人は出張中だった。昭和6年10月19生まれ、51歳。



町長 川が切れるというけど、山城町の場合、家、田畑のはるか上まで土が積まれ、通常その上を川はチョロチョロと流れとるわけや。この天井川、一階川の切れた恐ろしさというのは体験したもんでないと仲々わかりません。蟹瀬寺の裏で天神川の南側の堤がストーンと落ちて北側だけ残っていましたが、川床はどどこいかなと搜したら、はるか高いところにチョコンと残ってる。一階どころか、二階の上ぐらいはありますな。

町長 矢嶋さんとこは鳴子川の、福地さんとは不動川の沿線やったわけや。
福地 棚倉で残ったんはワシとこの中垣内と町長はんこの洪川のまわりだけや。後は全部いかれた。
町長 天神川の決壊箇所をみてわかったことですが、南側が切れてますね。堤防は水のあたるところではなくて、ふところから切れるというのがあのかのときの経験でわかりました。

福地 橋とか床止工といった構造物のあるところはほとんどやられてますな。デレーケえん堤も奥のものはツメから切れてますわ。
町長 人命も多数失なわれたわけやけど、農林災害がまたすごかったですな。冬場とちがって夏場ですさかい、きれいな青田が一面真茶けた泥沼や。
福地 七月のかかりのころを半夏生というて、

この経験を教訓に 今度、町を原点から見直そう

あれ過ぎたら米とれへんいいですよ。それが蒔田で試験的に遅うに苗植えたら、なんととれましたな。半期以上の米とれたんところがいますか。
町長 そやそや、そんなこともあった。ところで私の記憶では、三時半や四時にはもう雨はやんでいったような気がするんです。だから一番ものすごう降ったんは二時ごろとちがいますか。
矢嶋 十二時から二時ごろまでですね。
村田 雷も鳴ってましたな。
町長 夏のことやし、バリバリ、ザーザーはあたりまえのことやけど、まさかそんな大雨になるとは夢にも思わへんかった。山間部、和東、大河原の方はどれだけきつう降ったか想像もつきませんな。
福地 トユに入った雨があふれてスダレのようにザーザー落ちてましたわ。
町長 バケツをぶちやけた降り方。
村田 上狛の被害は少なくて、高麗と棚倉に集中しましたな、被害は。
矢嶋 木津川がどうもなかったですからね。

こわいぐらいの大雨 被害の集中した高麗・棚倉

用意しとけや」と外からいうてくれはりまして、飛び起きて国鉄の線路つたいに近所をさそて高い所へ逃げたんです。
町長 木津川が危いことですか。
矢嶋 いや、逃げよういうてきてくれはったときは、もう上(鳴子川)が切れてたんです。「上が切れた」いうてきてくれはったんです。はじめは木津川でしたんですけどな。
町長 鳴子川が切れたからは逃げようということやったんですね。
矢嶋 逃げたんは一時か、三時ごろやったと思いますねん。四時ごろにはもうボツと明るくなつてましたから、線路から下を見てまし



災害後、北河原区倉庫前に一か月間開設された高麗村臨時保育所。一面の河原となった場所に設けられた保育所は、計四六人の子どもたちにとっては天国だった。後列左から七番目が矢嶋さん。

不気味に口をあけた不動川決壊口。一瞬にして大絶壁が出現した。



後日、天井川の上流を見に行ったとき、昼日中山沿いに登ってゆくとまぶしいてしようがない。なんでもかいうたら、谷には岩盤と大きな石だけ残ったわけやけども、ものすごい急流に洗われて、みな真っ白けの花こう岩や。白い白い帯状の川床と岩がズツと上の方まで続いている姿をみたら流れた水のかさ、いきおいが想像されて、大自然の恐ろしさにゾツとしました。

福地 あの時、天井川が押し流した十萬㎡の砂を処分せいでいうことで私は随分骨を折らされたもんです。すべての復旧には当時の金で八、〇〇万円、今なら二〇億近い金がかかっています。今の山城町の予算一年分ぐらいの仕事で昭和二十八年から五年かかりました。

村田 あのじぶん、我々はほんまによう動けたもんやと思いますわ。達者やったんやなあ。

昼は復旧作業、夜は資材の買出しという日がずっと続きましたもん。

福地 色々と教えられることは多かったですが。被災者の収容先から、救援物資ではほんまに必要なものはなにかと。一番やかましゅういわれたんは地下タビ、縄、ロープの類でしたわ。行方不明者の捜索、犠牲者の死体の埋葬。消防団はしんどかったと思いますわ。町長 消防団の問題ですけど、町に住む人すべてに消防団の精神は必要やとは思いますが、これだけ昼間勤めにする人が多くなった今、なかあるといきおい近くにいる者はかりがかりだされるという問題があるのも事実ですな。

福地 天井川の復旧にあたっては、滋賀県の天井川専門の技術者の発言には重みがありましたな。大雨のとき、天井川には水と同じだけの土砂がくるんです。一㎡の流量があれば、あと一㎡の土砂がくることを考えて設計せねばいかんというんです。その後、府の方でも天井川をよく認識して思いついた設計をしてくれはりました。現在の川は災害前より幅員が広がっていますが、この川幅を広げるということは国庫補助対象の災害復旧の場合、なかなか許可がおりないもんです。ともかく若い人も天井川のことにはよく知っておいてほしい。山城町にはそういう川が四



古川方章(ふるかわほうしょう)

現山城町長。災害当時は棚倉村消防団第一部長。昭和31年、3町村合併時に発足した山城町消防団の初代副団長を経て現在に至る。大正11年3月31日生まれ 61歳。

写真右上／復旧工事に活躍するブルドーザー。当時はまだ珍しい存在で機械の威力をまざまざとみせつけられたものである。
写真右下／不動川上流の惨状。急流に洗われ白く光る川筋が不気味だ。

旧高麗村における400ページものぼう大な南山城水害の記録。



不動川沿いチビッコ広場の南側に残る民家(旧富岡氏宅)。当時の水害のありさまを今に残している。7月に老朽が激しいため取り壊された。



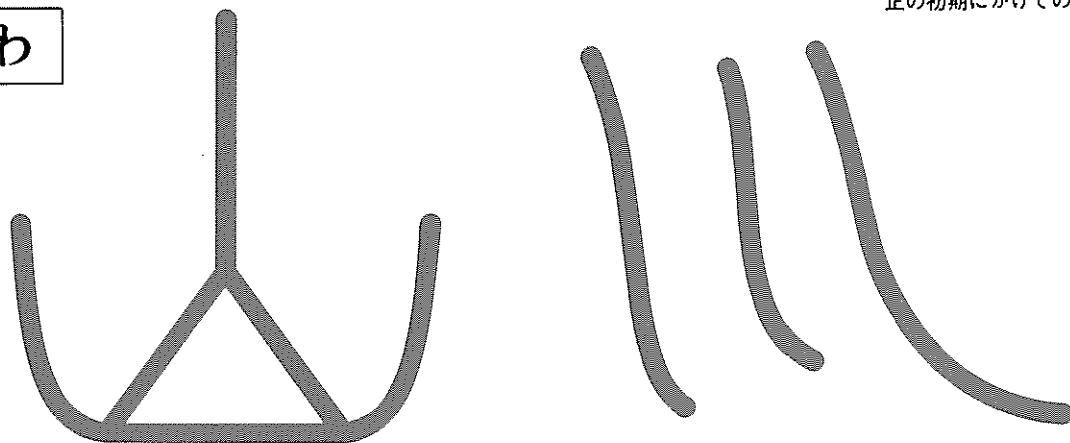
つもあるんやから。町長 そうですね。こわかった、恐ろしかったのは事実ですけど、今後あの南山城水害以上の災害が絶対に起きないという保証はないんですから。はつきりいつて、山城町は恵まれた地形ではありません。まず、砂防指定地が多いということ、例のデレーケン堤に始まって砂防事業一〇〇年の歴史を持つということは、それだけ危険な箇所も多いということなんです。しかし、この町の姿は変えられない。今後の町づくりにおいても、この二階川をぬきに考えることは到底できません。山城町も昭和六五年には人口二万一千人の

時代の潮流とはいえ、それに流されつばなしで、無秩序、無計画な開発、夢の花園を追い求めるばかりではいかんと思います。お集まりいただいた皆様の体験、教訓、思い出はこれからの町づくりに重要な示唆を含むものばかりです。三〇年前のできごととはいえ、あの水害を体験したものには古いようで新しい事件です。二度とあのような悲惨な災害がおきないことを祈り、皆様とともに地に足のついた町づくりを考えてゆかねばならないと考えております。お忙しい中、貴重なお話を聞かせていただき、どうもありがとうございます。(敬称略)



植林前の三上山。すさまじいまでの荒れ山である。明治末期から大正の初期にかけての姿と思われる。

やま&かわ



町南部に多いため池。天井川の水が使えないところではこういったため池に農業用水を依存する。



墓の谷池



田護池



蓮池

川をたどれば水源に出会う。すべてのものに源が存する。出てきたる因を考えたとき、に私たちの郷土の特色は、ことは否めない。山ありき。

山城町の東半分以上を占める山地は、その地質のほとんどが崩壊しやすい性質を持つ花こう岩で構成されている。花こう岩の風化は他の岩石とちがい風化が早く、一足飛びに砂になり、さらに水をふくむと容積が拡大するという特質を持っている。風化浸食された土砂は、すべて東部山地に源を持つ、渋川・天神川・不動川・鳴子川上流の谷を下り、下流にばく大な量の土砂を堆積させる。こうしてできた小扇状地と木津

川のはんらん原に私たちの町は開けている。さて、三〇年前の南山城水害では、この地方に特有の天井川（二階川）の存在がにわかにクローズアップされることとなった。汽車や道路はこれらの川の下をくぐり、私たちの家、田畑をはるかに見下ろし、流れる天井川。水田の用水路、生活排水路も立体交差を重ね、本流の木津川に注いでいる。こういった郷土の光景は、正直なところ、あの災害までは私たちにあって、なんの興味も関心もなく、一朝にしてあのような大水害を引き起こし、郷土の姿を交差せしめる力を秘めていたとは想像だにできなかったといつてよからう。ジャーナリズムのかまびすしい指摘もあり、あの水害を契機に私たちの天井川に対する認識は完全に新たなものとなった。

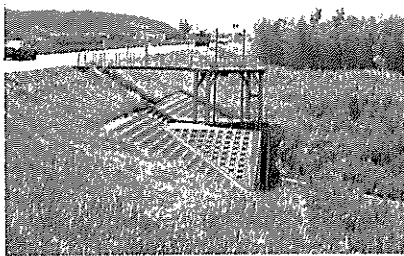
ところで、河川とは本来、天井川の性質を持っている。上流から下流へと土砂を堆積し、河床を高めながら流れ、ある程度高まると洪水を起こし、新たに低地へと流路をつくり変える。このくり返し、川の原始の形態であり、土地に人の手の加わらない時代の川の姿である。しかし、人がその土地に住まい、作物をつくり、安定した生活を営むためには、堤防を築き、不安定な流路を固定する必要がある。

山城町の天井川は江戸時代以降、急速に発達したといわれる。集落の人口が増え、農業の生産力を高めるために新しい田畑がつくられ、人家も流路沿いに建てられるようになった。もはや洪水のはんらんは許されない。より強固な堤防を築く必要から、天井川はどんどん高くなってゆく。三上山からは下流へとばく大な土砂が流れつづける。山城町の河川はこうした天井川発達の過程を端的にあらわしているものである。

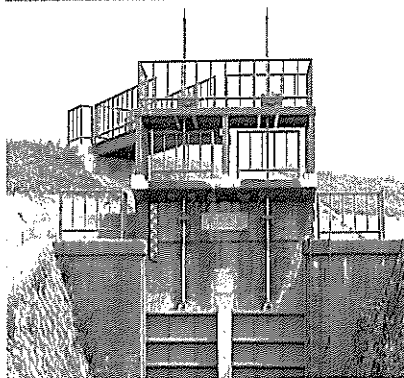
堤防の必要性は否定することはできないが、あのとときの大災害は、人と自然との関わりにおける矛盾を露呈したものととして、今後に大きな教訓と課題を残したものと考えねばならないだろう。

大雨のさい、町を内水の被害から守る樋門。堤防とならぶ水防の要である。

棚倉樋門



北河原樋門

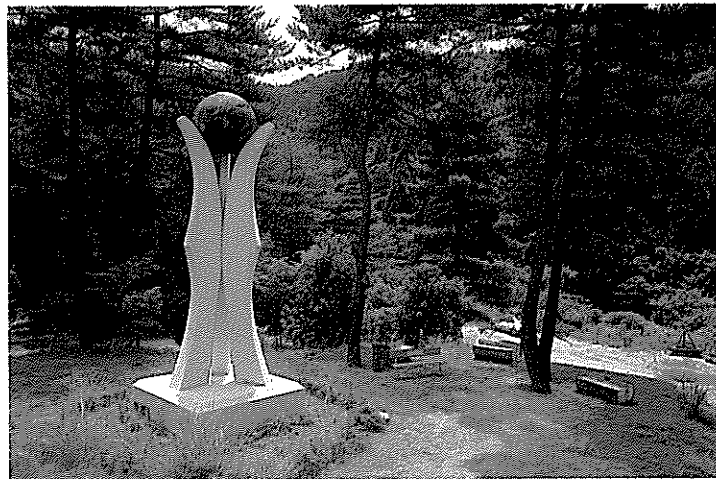


大川樋門



西殿樋門





鳴子川

流域面積五・一km²、流路の総延長は五七五km（山城町分のみ）あり、四つの天井川中一番長い。旧高麗村と棚倉村とを流れる。平尾、里屋敷にある涌出宮のいごもり祭の起こりについて、鳴子川東方の山から大蛇（水神）がきて、人々を悩まし、勇者がこれを切り、霊を慰めるため始められたという説もあり、この伝説は、そのころからこの川がはらんし、人々を苦しめていたことを物語っているようだ。また貞享元年（一六八四）の平尾村絵図によれば、当時すでに鳴子川は砂川で、低地に入って天井川を形成し、木津川への流入口では田地より川床までの高さが五間（約九m）あったことがわかる。

水害時には今の上鳴子橋を中心に南側の堤防が約二〇〇mにわたって決壊、北河原一帯は土砂におおわれ、名の通りの河原と化した。

現在、上流には、山城自然公園一八七haが整備されている。人々の憩いの場としての機能に加えて、土砂流失防止、保安林としての役目も果たしていることをつけ加えておきたい。

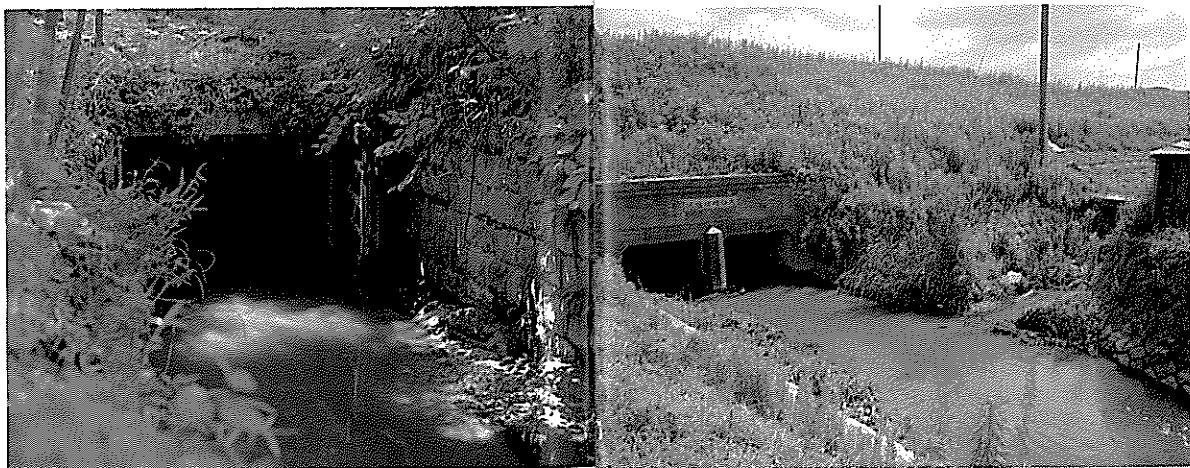
不動川

町東北部山岳地帯、三上山の西に源を発する。流域面積四・三km²、流路の延長は、四・五kmにおよぶ。その集水区域の地質はよく風化した花こう岩の砂で低い山地を形成している。

この不動川の土砂流失による天井川の発達は、下流の平尾の集落、田畑に大きな影響を与え、治山治水は流域に住む者にとって、昔から大きな課題であった。貞享元年（一六八四）の平尾村絵図を見ると、その当時すでに川は、木津川流入口で七間半から十間（約二・五〜一・八m）の高さにまで達していたことがわかる。最もよく発達した天井川として地質学者の研究の対象にもなっている。

上流には谷山不動といわれる小宇があり、密教の修行場であったと思われる。不動川の名はこれによるという。さらに、上流に

▼不動川の下をくぐる萩ノ谷川（悪水路）



天神川

南山水害後建てられたモニュメントの数々
写真上／水害記念碑（北河原）
写真下右／災害記念塔（南織田）
写真下左／南山水害記念碑（北平尾）



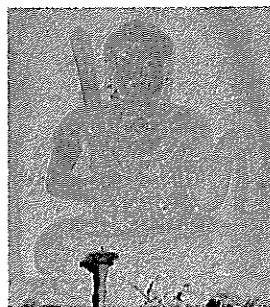
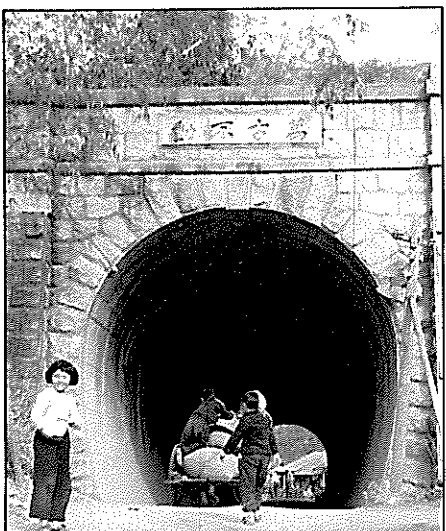
流域面積三・〇km²、流路延長六・〇km。町の東北部より、織田を西へ流れ木津川本流に注ぐ。

水害時、この天神川と不動川にはさまれた南織田では両河川の決壊により、壊滅ともいえる被害をこうむった。国宝、釈迦如来座像を有する蟹満寺もこのとき、床上まで浸水したが、かろうじて流失だけはまぬがれることができた。

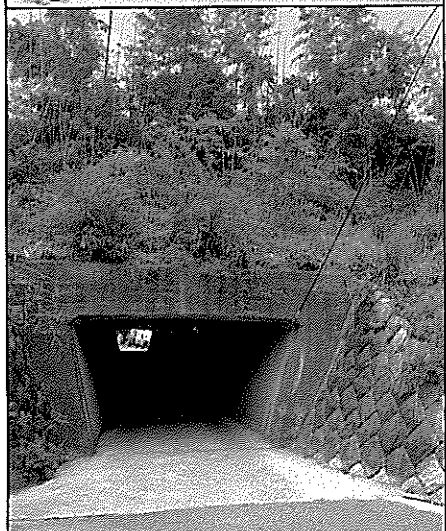
▲天神川の下をくぐる萩ノ谷川。低地排水の萩ノ谷川は不動川と天神川をトンネルで立体交差し、棚倉樋門をくぐって木津川河川敷に出た後もしばらくは木津本流と平行して流れ、やっと合流するに至る。それだけ木津川自身の河床も高いわけである。この萩ノ谷川でさえ、流路の一部に天井川の形態をとっているのだから驚く。

渋川

町の最北端、井手町との間を流れ、この川が井手町と山城町とのほぼ境界にあたる。流域面積は一・八km²、流路延長一・八五km。南山水害のおり、山城町において被害をこうむった地域は、一番北のこの渋川から一番南の鳴子川まで、四つの天井川に囲まれた地域に集中したといっても過言ではない。渋川については、下流で決壊箇所はでたものの人家の密集地をはずれていたことは不幸中の幸いであった。

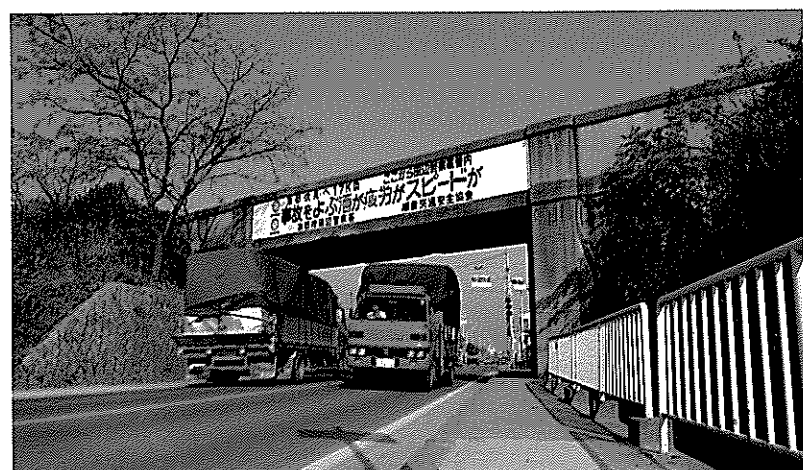


谷山不動尊磨崖仏



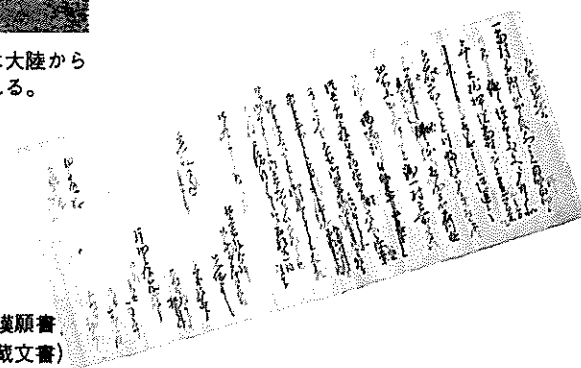
不動川トンネルの変遷
写真上／南山水害以前
写真下／水害以後、不動川の川床が6m下げられ、普通乗用車がやっと通れる高さになった。

国道24号線をまたぐ渋川。ドライバーの皆さん、これは道路でも鉄道でもありません。川ですよ。





古文書・古絵図に 記された先祖の 水との戦い

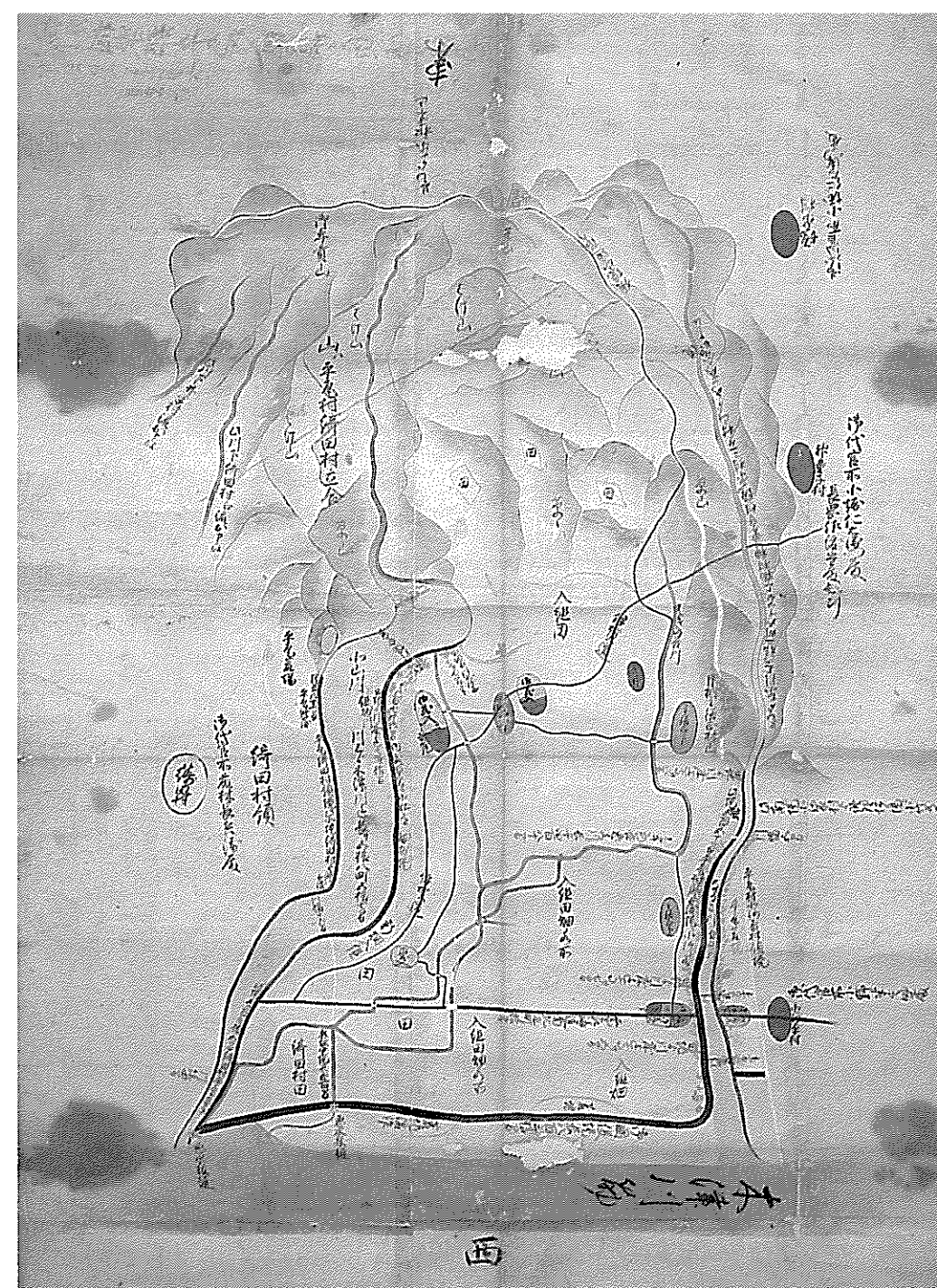


今から約300年前の平尾の絵図。現不動川は北山川と記され、低地に入って急に川幅が広がっているのがわかる。中流で15間(約27m)、木津川口では4間(約7.2m)とある。不動川を境に綺田村の名が見え、平尾村では南岸に長さ676間(約1.2km)の留砂堤を築き、うち200間(約360m)には小松道をつくっている。南岸の修復は綺田村との立会でなされている。平尾・綺田両村は毎年5月、1戸あたり1坪ずつ河床の土砂を取り除く「坪掘り」「坪揚げ」とよばれる作業を明治初期まで続けた。その苦勞がしのばれる。

右側の川は鳴子川で、南岸堤は北河原村が修理し小竹を植えている。北岸堤は長さ150間(約270m)で平尾村が修理し、小竹を植えている。

平尾村の悪水は「はぎの谷川」(現萩ノ谷川)が西北に流れ、小平尾村西方と綺田村に悪水抜樋が2か所あり木津川へ入るのは現在とほぼ同じ。

上方に描かれている「草山」「はげ山」は平尾村、小平尾村、綺田村の入会山で、「はげ山」は治水のための砂留山の役割をはたしていた。神童子村、瓶原村（現加茂町）の名もみえる。



領主・代官所へあてた堤築造の嘆願書
(中谷家蔵文書)

元禄14年(1701) 6月、8月 木津川洪水。
元禄12年(1699) 8~9月 木津川洪水。
天正18年(1590) 8月 木津川洪水。山城国中、海のようになる。
天文9年(1540) 8月 木津川洪水。木津では家がことごとくつぶれ、水に沈む。
寛正元年(1460) 8月 諸国大風雨。天文13年(1544) 7月 諸国大洪水。
享徳元年(1452) この年、諸国大洪水。天文8年(1539) 8月 京畿、諸国大風雨、洪水。
建保5年(1217) 9月 近畿大風雨。長祿3年(1459) 9月 大和、山城両国大風雨。
仁平元年(1152) 7月 大風雨で宇治橋が流失。正応3年(1290) 10月 諸国洪水。
長久3年(1115) この年、洪水により五穀不作。永元元年(1207) 7月 畿内大風雨。
嘉祥元年(1132) 5月 大雨で淀川の浮橋が流失。永元元年(1118) 6月 長雨で河川が増水、でき死者多数。
延壽8年(908) 11月 諸国の池、溝、えん堤を修理させる。元永元年(1118) 6月 畿内大風雨。
天長8年(848) 8月 京畿に大洪水。河陽縣、宇治橋が崩壊し、菊田堤が崩れる。
弘仁12年(821) 10月 山城、摂津、河内諸郡に香達池を築造。
弘仁3年(812) 7月 山城、摂津、河内諸郡に各々新穀20貫を与え、その世
宝龜5年(774) 9月 諸国の溝池を修造。延暦19年
天平宝字8年(764) 8月 大和、河内、山背三國に池
天平宝字6年(762) 4月 河内郡修山池
和銅3年(710) 2月 6月
天武4年

(675) 飛鳥山土流の草木採取を禁じ、畿内の山野の伐木を禁止する。
初めて守山に置き、諸山の伐木を禁止。
の堤決壊、入込のべ8万3千人で修造。
(800) 10月 葛野川修堤に諸国より1万人を徴発
拳の利を慰助の用にあてる。

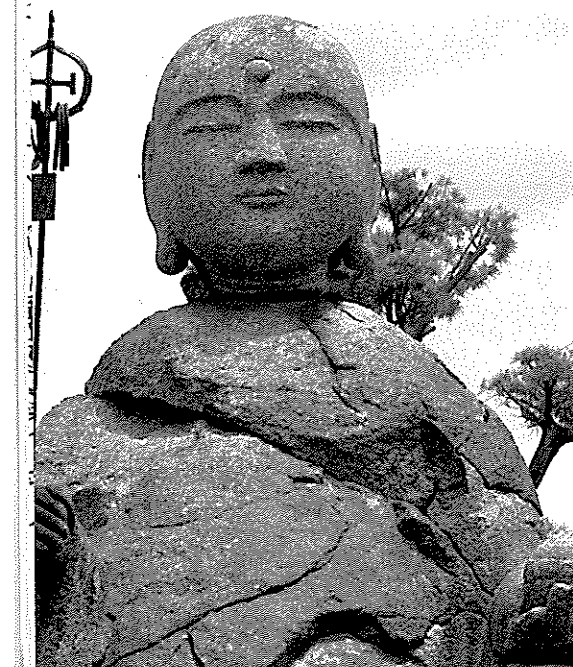
推古15年(607) 冬、陵・山背・河内にかんがい用の池溝を築く。
4世紀 河内国茨田郡に茨田堤を築く
日本最初の木防工事といわれる。

地蔵は泣かない
悩み苦しむ人々を
救うのだから

古代、木津川は泉川とよばれた。奈良の都に税を運ぶ東国、北国の役民にとってこの川は最後の難所であり、大雨のたびごとにはんらんをくりかえし、人々を苦しめるこの川には容易に橋をかけることができなかったという。

天平13年(741) 行基がここに泉橋をかけ、

橋の守護として泉橋寺を建立した。鎌倉時代になって寺には水防はもとより、悪事災禍の守り仏として巨大な石仏が安置された。寺はたび重なる戦火で焼け、往時の面影はないが、いくたびかの洪水を見てきたのであろう地藏は今も人々の厚い信仰を集めている。



年表
水と
関わる。



しよせん、オレは 雇われ外人 技術を切り売り するだけなのか



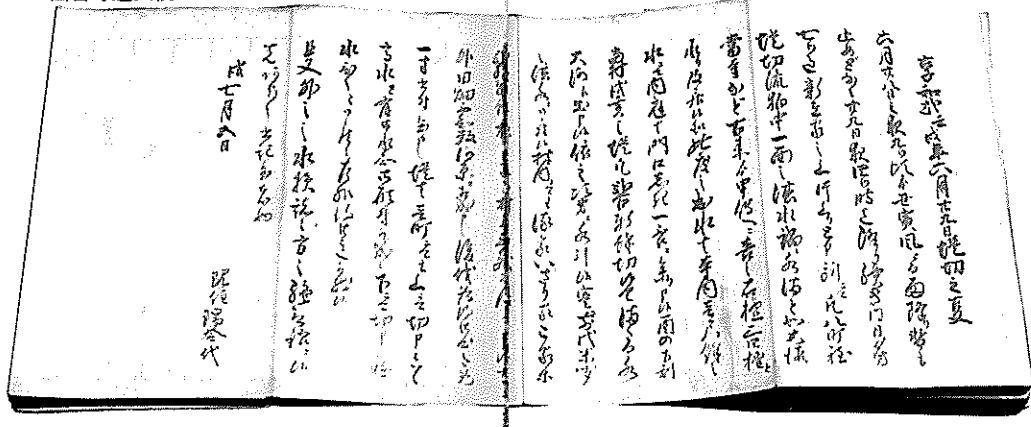
明治になって政府は日本の近代化に向けて数多くの技術をヨーロッパから導入した。治水にはオランダの技術が採用され、明治5～6年にかけて、山城町にもゆかりの深いファン・ドールン、ヨハネス・デレーケなどの技術者が来日した。

なかでも、デレーケはヨーロッパ技術の科学的合理性を日本の自然と文化に調和させることに腐心し、治山と水利を結びつけ

た水系一貫の治水事業を主張、展開した。しかし、明治20年代になると洪水防御を主目的とする堤防万能型の工法がオランダ式の工法に代って優勢となる。富国強兵、殖産興業の旗印のもと、山は荒れ、古くて地味な治山が軽視される時代のすう勢を彼は危うしたが、しかし自分は一人のお雇い外人にすぎぬとその立場を嘆いたといわれる。

享和の大洪水が 残したものは...

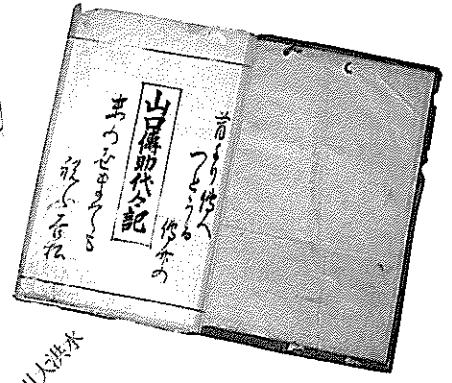
西音寺過去帳



享和2年(1802)6月28日の洪水は、近世この地方、木津川筋を襲った四大洪水の一つに数えられ、新在家から北河原に至る旧狛8村に壊滅的な打撃を与える大災害をもたらした。

北河原、西音寺の過去帳に当時の住職がそのときのありさまを記している。新在家の上手、木津川の片刈堤がおよそ8町ほど(約864m)切れ、「狛中一面の洪水誠に水満候はば大海の如し」「実に前代未聞の洪水」「家は村方(北河原)残らずそんじ」「田畑数知れず河原に相成候」などとある。

この過去帳は昭和28年の南山城水害のおり、その存在が人々のうわさにのぼり、確認されたという。およそ、180年前のこの記事の後半には「後代の御心得の為、一寸書付置き申す」とある。



山口伝助代々記

山口家は元禄年間から代々「伝助」を名のる本百姓であったが、享和のころには家督も傾き、残っていた田地も「片刈切れ」の洪水でとこがれ(肥沃な耕土が流されてしまうこと)となった。

伝助は洪水で切れた堤の修復に毎日でかけ、少しずつたくわえたお金で野道具を買ひ整えていった。やがて小作をするようになり、家も普請し、その後も苦勞を重ねてもとの本百姓にまで家をたてなおすことができた。

この物語は子孫のために書き残された山口家の記録である。30年前の水害においても、これと似たような経験をした家が少なくないはずである。

昭和57年(1982)8月 集中豪雨で町内の一部でかけ崩れ、冠水の被害がある。

昭和39年(1964) 新河川法成立、山城大橋竣工、長さ512m

昭和34年(1959) 伊勢湾台風災害、木津川大洪水。

昭和31年(1956) 木津川増水、玉木橋竣工、長さ463m

昭和28年(1953) 南山城水害、13号台風災害。

昭和26年(1951) 梅雨前線で甚／谷川等小川川はんらん。

昭和24年(1949) 台風テラ、ヘスター災害。

昭和9年(1934) 室戸台風災害。

大正14年(1925) 山城水害。

大正7年(1918) 木津川大洪水、木津川大洪水。

大正6年(1917) 木津川大洪水、木津川大洪水。

明治39年(1906) 木津川大洪水、木津川大洪水。

明治33年(1900) 木津川大洪水、木津川大洪水。

明治29年(1896) 山城水害、山城水害。

明治10年(1877) 山城水害、山城水害。

明治7年(1874) 河川の等級定められ、一等河になる。

明治2年(1869) 木津川大洪水。

慶応4年(1868) 木津川大洪水。

船から鉄道へ 鉄道から自動車へ 次にくるものは...

運輸・交通を川に依存する時代、舟運は治水においても重視される存在であった。舟の運行のためには流量の安定がはかられ、川のしゅんせつもおこたうわけにはいかない。さらに上流の治山、砂防をないがしろにしては河床が上昇して、舟の運行に支障をきたすと同時に、洪水の危険も増すことから山の保全にも細かく配慮が加えられた。鉄道の敷設によりこの舟運は急速に衰え、

治山・治水にも新しい時代を迎えた。木材の搬出でにぎわった木津川の舟運も大正末期にはもうすっかりさびれていたという。

図は木津川「藪の渡」。綿田と対岸の菱田(現精華町)を結んだ。このほか、上狛と木津を結んだ「泉の渡」は古く源氏物語にもその名がみえる。町内に残る「浜」「河原」などのつく地名はこの渡にちなんだものといわれる。

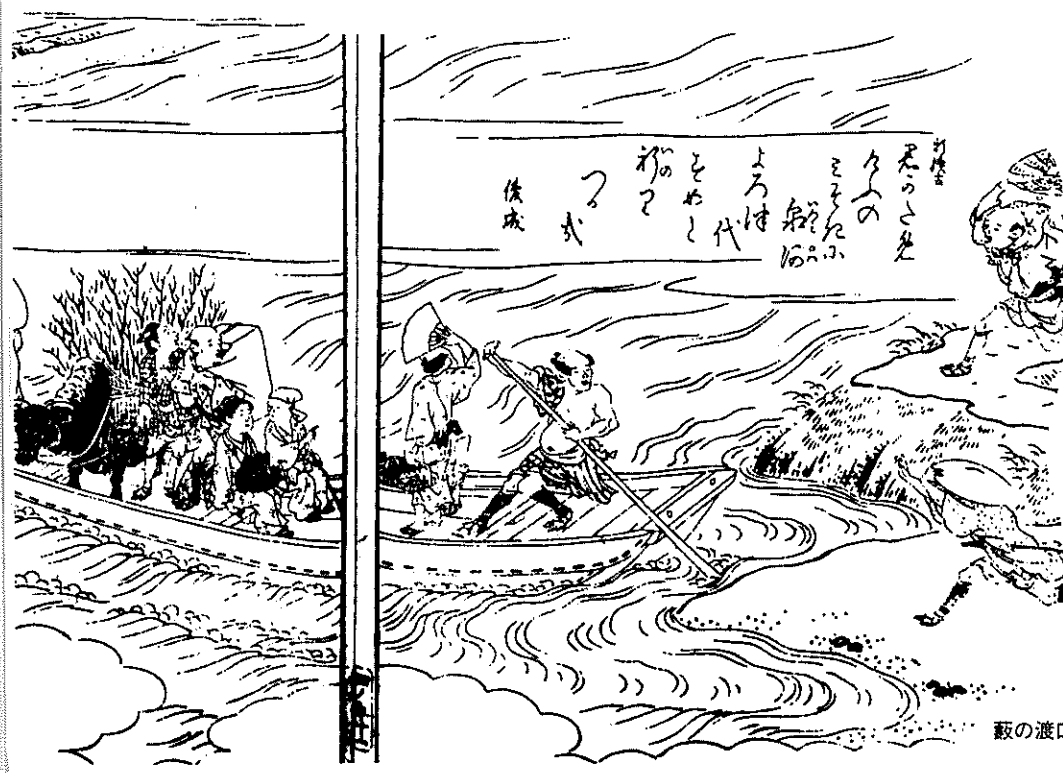


難工事完成

町内では、木津川・天井川の水が使えない田畑は、用水として丘陵部にあるため池を用いる。こういったため池は南部の上狛に多い。蓮池、田舎池など、昔から何度も改修を重ね、今日まで利用され続けている。

蓮池の東にある新池は江戸末期、水不足解消のため、横穴で蓮池と結ばれた。たくさんの方々が連日工事に励み、嘉永6年(1853)に完成した際、人々は皆感激し、周辺の民家は大いに喜んだという。

南山城水害では、町内のため池には幸いにも被害がなかったが、井手町では大正池が決壊し、死者100人余りの大惨事を招いたことがよく知られている。



浅田家蔵文書



竹流し法（不動川） 地域の人々の生み出した水防の知恵。昭和28年の水害時にも水勢を弱めるのに大きな効果があったことが知られている。



治山・治水 事業の変遷

真の知恵、技術とはなにか

「これは川なんてもんじゃない、滝だ」明治新政府の招きで来日し、各地で治水の技術指導にあたったオランダ人技師ヨハネス・デレーケのことばである。日本の河川をつぶさに調査した彼は、母国オランダと異なり、平地が少なく急しゅんな山地がすぐ背後にそびえるこの国の地形をみて驚きを禁じ得なかったようである。

河川の最大流量と最小流量の比を河況係数といい、この数値が大きければ大きいほど荒れ川とみられる。わが国の諸河川の河況係数は、諸外国のそれにくらべるとずばぬけて大きいのが特徴である。すなわち、洪水時の流量と渇水時の流量との差がきわめて激しいうえに、概して流路の短い日本の川は、ひとたび大雨となれば鉄砲水となつて短時間のうちに下流を襲う。水害の記録は歴史書とともに大和の時代から枚挙にいとまがない。

さて、近代化に向けて、ヨーロッパの科学技術がせきを切った水のように日本に入ってきた明治時代、その中期において日本の治水にも新しい時代が始まった。それまで日本の治水においてとられていた工法は低水工事とよばれ、水を「歩かせる」「なだめる」工法と形容される。水防林や遊水池を配し、あぜを低くするなどの工夫をこらし、想像をこえる大洪水は別として、通常の降雨では、りっぱに水害防御の役目をはたしたという意味では現在も学ばべき点が多い。堤防においても武田信

玄の霞堤（断続堤）にみられる洪水を川の外へ逆流、停滞させるもの、加藤清正の乗越堤に代表される故意に堤を低くし、堤防の一角から水をあふれさせるものなど、流量の安定、洪水時の川の負担を軽くするなどの工夫がみられる。大洪水に際しては、水の一部をはらんさせ、洪水の勢いを弱めることが配慮された。

一方、それ以後の工法は高水工事とよばれ、全面的に堤防に依存するものである。連続堤防を築き、高水位に対応しようとするこの工法は水を「走らせる」「押し込める」方式といわれる。

鉄道の敷設がすすみ、舟運が急激に衰退してゆくとともに、川の持つ機能はしだい



不動川上流相谷に残るデレーケえん堤。オランダの合理性と近代的土木技術の産物であるが、わが国古来からの工法を基礎としている。



三上山は ハゲ山だった。

左／植林が始められて間もない三上山。14ページの植林前の写真と比較されたい。下／棚倉砂防工場の沿革。近代に入ってから木津川砂防の歩みは明治11年、碓氷に設けられた土木局出張砂防掛に始まる。木津川砂防100年の歴史は山城町から始まった。



大正の初期（4～5年ごろ）まで、碓氷外付に木津川砂防工事事務所があり、三上山の砂防工事にあたっていた。当時、技術者たちはそれぞれ平尾に分宿し、人夫として工事に従事した地元の人々は“クロカ”と呼ばれていた。年よりの話では、大正4～5年ごろには、棚倉駅に貨車で運ばれてきた植林

用の馬ふんをカチンボ（担ぎ棒）で三上山まで運んでいたという。

こうして進められた骨の折れる植林も最初の松によるそれは失敗に終わった。その後、2回目のヒメヤシャブシを用いた植林がみごと成功し、現在の緑の三上山に至った。

での洪水危険地帯にも田畑が開け、家屋や工場が建てられた。しかし、ひとたび想像を絶する大洪水が襲ったとき、堤防の決壊は、富と人口の集中した流域にばく大な被害をもたらす。そこで、より堅ろうな堤防が築かれるが、堤防が強さを増せば増すだけ、洪水のエネルギーも堤防に集中するようになり、水と堤防の戦いはいやがうえにもし烈さを増してゆく。こうした悪循環の

木津川防災竹林 昔に比べると防災を目的とする竹ヤブはすっかり減ってしまった。



に洪水防御に集約されるようになり、高水工事はそれまでの低水工事にかわって治水工法の主流を占めるようになった。川を堅固な堤防で守り、水の堤防外部への流出を防ぐことがこの工法の主眼である。これにより高度な土地利用が可能となり、それま

ため、洪水の被害は近代になってからの方が大きいのは実に皮肉なことである。
昭和二〇年代は全国的に大水害がひん発した。それを契機に治山・治水事業にも新計画基準が設けられた。山城町においても南山城水害以後、天井川上流には砂防ダムが建設され、川幅も広げられ、堤防もより完備したものとなった。川床も木津川・天井川いずれも当時よりはだいぶ低くなっている。木津川上流には多目的ダムも設けられ、それまでの防災一本やりに加えて水資源の利用をはかる総合的で多目的な治山・治水対策がとられるに至っている。

しかし、治山・治水における工法とはあくまでも手段にすぎない。その目的は私たち、人間が決める。私たちが自然とどのようにつき合ってゆくか、いいかえれば私たちが自然との関わり合いにおいて、なにを求め、なにを不要とするかによって新たな矛盾、予想もしなかった新しい形の災害が生まれてくる可能性のあることは否定できない。



現在のコンクリート堤防（不動川）

心得ておきたいこと

災害を防ぐ

7月5日午前9時過ぎごろ、
綺田神ノ木で野田川の堤防
が約13mに渡って決壊。



河川の防災

木津川の流域は奈良、三重、京都の一府二県にまたがっており、南山城村で諸支川を合流し、笠置山地を横断した後、木津町付近から城南平野をつらぬき、八幡市において宇治川、桂川と三河合流し淀川に入ります。この木津川を含む淀川水系は流域面積八、二四〇km²におよび、大阪市、京都市はじめ、その他数多くの衛星都市が流域沿いに位置する関係から関西地方の社会・経済・文化の基盤をなす地域です。したがって、この淀川水系の治水と利水についての意義にはきわめて大きいものがあるといわねばなりません。

町の水防

一級河川で淀川水系に属する木津川が、町の西方を南北に流れ、加えて、南山城地方特有の天井川四線（洪川、天神川、不動川、鳴子川）が木津川に注ぎ町を分断していることが、山城町の地形の一つの特徴です。そのほか、野田川、萩ノ谷川、谷川、上狛川、西ノ口川などの小河川があり、大雨が降ることによってこれらの河川は、水があふれ、堤防が決壊する危険性をはらんでいます。また、一方、山間丘陵部にある老朽溜池の多くは、堤の老朽化、余水吐の故障などが随所にみられ、破堤の危険のあるものも多くあります。

このような状況から水防に課せられた使命は非常に大きく、水防業務には水防機関の総力を持って対処し、被害を最小限度にしないと、住民の暮らしと財産を守ることにつとめなければなりません。さらに、これら水防業務は、単に水防関係機関だけの力では十分といえず、住民のおのの自主的な協力を得て万全を期す必要があります。

改修計画

建設省と京都府の改修計画による水系一貫した全体計画に基づいた治水事業が実施されます。

- 1 市街地周辺の河川改修
上狛川、萩ノ谷川、里川
- 2 内水排除対策
萩ノ谷川樋門改修
- 3 砂防対策
相谷川えん堤工事

●水防信号

信号区分	伝達区分	警鐘信号	サイレン信号
第1信号	警戒水位に達したことを知らせる。	● 休止 ● 休止 ● 休止 一点打	約5秒 休止 約5秒 休止 約5秒 休止 約5秒 約15秒 約15秒 約15秒
第2信号	水防団員全員の出動を知らせる。	● ● ● ● ● ● ● ● 三点打	約5秒 休止 約5秒 休止 約5秒 休止 約5秒 約6秒 約6秒 約6秒
第3信号	区域内の居住者で壮健者の出動を知らせる。	● ● ● ● ● ● ● ● 四点打	約10秒 休止 約10秒 休止 約10秒 約5秒 約5秒
第4信号	必要と認める区域内の居住者全員の避難すべきことを知らせる。	乱 打	約1分 休止 約1分 休止 約1分 約5秒 約5秒

所 属	発行者氏名	発行日	題 号	返却日

36671

編集後記

「災害は忘れたころにやってくる」ということがあります。この場合の災害とは、地震をさしていますが、もとより水害もこの例外ではありません。江戸時代には洪水は年中行事という時期もあり、近年大河川のはらんこそかけをひそめているものの、中小河川の決壊による悲惨な災害は、昨年の長崎の水害が皆様の記憶に新しいことと思います。

水害に限らずすべての天変地異のもたらす被害というものは、そのときの人間社会の経済的な構造と深く関わっています。人家、田畑のないところで川が切れてもそれを被害とはよばず、人の生命と財産をどれだけ侵害したかによって災害とその規模が表現されます。私たち人間は、多かれ少



●表紙説明／鳴子川の決壊で河原となった北河原地区。

なれ自然を自分たちの都合のよいようにつくり変え、今日の豊かな生活を築きあげてきました。こうした人間のおごりに対してひとたび自然がその本性をあらわにするとき、その被害は前にもまして増大するところとなります。安全はお金で買えると錯覚したり、町の防災は一部の専門家に任せておけばよいという態度がこれに拍車をかけます。

三〇年前、町を襲ったあの水害を記録したこの小さな冊子を皆様の元にお届けすることのできるこの機会にぜひあのときの体験を子どもたちに、孫たちに話してあげてほしいものだと思います。人は体験を教訓として後世にいかすことのできる唯一の生き物なのですから。

28災 南山城水害記念誌
企画・編集／山城町総務課
制作／株式会社 日本出版
発行／昭和58年 8月15日

ご協力いただいた方々
山本英一／西井ふみえ／中野修一／木村安宏／
大西康充／辻俊一／山口晃／福地耕太郎／矢嶋
喜久子／村田昌三／榊原明美／國吉基史／木村
一豊／曾根明美／西嶋美治、ヤエノ、千恵子／
中津川敬朗／堀井篤／近畿地方建設局木津川上
流工事事務所／木津地方振興局／棚倉小学校／
西音寺

南山城水害においてお亡くなりになった方々
のごめい福を心からお祈り申し上げます。

